

富山県成長戦略会議 まちづくり戦略プロジェクトチーム

第1回 持続的な魅力ある田園地域検討専門部会 議事要旨

- 1 開催日時：令和6年7月9日（火）14:00-16:00
- 2 開催場所：県民会館612号室、オンライン
- 3 出席者（五十音順）

役職	氏名	備考
グリーンノートレーベル株式会社代表取締役	明石 博之	座長
里山 Retreat&Kitchen 阿迦舎 主宰	荻布 裕子	
朝日町埋蔵文化財保存活用施設 まいぶん KAN 学芸員	川端 典子	欠席
NPO 法人立山クラフト舎代表理事	佐藤 みどり	
Green Cities, Inc.代表取締役	山崎 満広	

4 内容

(1) <事務局>より資料説明

資料について戦略企画課より説明

(2) 委員発言要旨

<明石座長>

- ・今日のゴールは、まずスケジュール。これから県と受託業者と専門部会でうまくリンクしながら、3月末のいい成果を出せるように協力していかなければならない。資料1のスケジュールを見ると、1週間ずれると大変というシビアな日程になっている。この全体のスケジュール感と専門部会の開催頻度について議論したい。
- ・もう一つは、事業2の選考基準。
- ・さらに事業1の調査について、最初に専門部会で決めたイメージと実際の調査内容がちぐはぐにならないよう、調査の観点、切り口、テーマ（受託業者から提案のあったテーマも含めて）などに関して、どう注意して進めていただきたいかというアドバイスももらえればと思う。

<荻布委員>

- ・受託業者が北陸博報堂さんになったとのことだが、独自のプラス提案も細かく考えられていると感じた。印象的なのは、全県調査で学芸員さんにヒアリングするという点。きっと川端委員が喜ぶと思う。実際に学芸員さんにお話を聞くと、なんでこの方たちがもっと世間に

出ないのかなと思うので、とても良い視点だと思う。

- ・スケジュールについて、専門部会は事業1、事業2ごとに開催し、合計6回というイメージか。

<事務局>

- ・時期を見定めて、事業1と事業2を合わせて開催できるものは、効率よく開催させていただければ委員のご負担が少ないと考えている。

<佐藤委員>

- ・北陸博報堂から提案のあった3つのテーマについて、若者の関心が高い明るいテーマなので前向きに感じた。
- ・事業2のスケジュールについて、活動報告会では5か月間の活動内容を報告するようだが、5か月で何ができるのか、短い期間だと感じた。

<山崎委員>

- ・全体として事業1と事業2の関わりが薄いように感じる。アドバイザーの嶋田さんは事業1に関わるのか。

<事務局>

- ・事業1で分かったことを事業2に反映できれば、事業2が非常に内容の残るものになるだろうということで、アドバイザーには両方の事業に関わってもらえないか協議中。

<山崎委員>

- ・そうすると、この事業で実際に活動するのは、初めの準備と報告書の準備を考えると3か月ぐらいしかないと思う。なので、その3ヶ月の間に事業1の成果が流れ込んできて何かしら調整をするというのは難しそうだなと思った。
- ・事業2の成果について、実証実験は割と成果を出しやすいと思うが、時間が短いから大変かなと思う。ビジョンはすごく時間がかかることで、地元の人意見の調整や行動しながら考えることをしないといけない。ビジョンを作ったことがないチームが集まって、みんな何か目標を作るのは割と時間がかかる作業なので、これを秋口から冬にかけて作っていく。そして、ある程度の形にするのは結構大変な作業。その辺はどういう風に考えているのか。

<明石座長>

- ・お三方の今の質問等を踏まえて確認するが、事業1プロデュース事業のテーマについて、プラスアルファされた3つのテーマが非常にいいというご意見があったが、それに関連して、資料1の3ページで地域資源のテーマ「地域で活動するコミュニティ」がグレーになっ

ている意味を説明してほしい。

<事務局>

- ・当初、「地域で活動するコミュニティ」も発掘するテーマと設定していたが、受託業者との協議の中で、コミュニティは、全てのテーマ、資源に関わってくる。例えば美しい景観、土地の歴史、食文化、そういった資源に関わるコミュニティの有無を評価の視点の2番、3番で見えていくこととした。ある資源に関わるコミュニティがあれば、そこを加点評価していく。そのため、コミュニティはテーマからは外した。コミュニティの調査をやめるのではなく、それぞれの資源に紐づく形式で、この地域のこの美しい景観を維持しているのはこの自治会の方々に、こんなコミュニティがある、という形で調査していく。

<明石座長>

- ・私も、学芸員さんにヒアリングに行くのはとてもいいと思っている。 全県調査の時にこの専門部会の委員にもヒアリングしてもらうのはどうか。

<事務局>

- ・ぜひお願いできればありがたい。

<<了承>>

<明石座長>

- ・山崎委員から指摘のあった、事業1と事業2の接続について、そもそも事業1の全県調査と同時に事業2の公募も進めていくという中で、事業間の相乗効果が生まれるのでは、というのが事業を検討する中での論点であった。この点についての工夫はどう考えているか。
- ・もう1つは、事業2で成果を出していくための実証実験とビジョンを描いていくが、どちらかというビジョンを描いていく方が結構時間がかかるのではないかとということで、その点についての工夫はあるか。

<事務局>

- ・まず、事業1と事業2の連携については、予算編成の段階から非常に議論を深めてきたところ。現時点では、連携の必要性を感じているが、明確にスキームとして、「事業1のここに事業2の知見を活かしていこう」とか「事業2のここを作りこむために、先に事業1のここをやるべきだ」というところまでは落とし込めていない。
- ・想定として、事業2に応募してきた方に対して、事業1で調査した事例を共有することやその際にアドバイザーである嶋田氏からも助言いただければいいのではと考えている。
- ・もう1点のビジョンの作り込みに時間がかかるのではという懸念については、極力、活動

期間を長くするために準備を前倒しして実施しており、加えて説明会において事業趣旨を理解し、想いを持つ方にこの事業をしっかりと届けるところからやっていくという対応をしている。伴走支援の中で、強い想いを持つ方に重点的に支援したいと考えている。山崎委員からは、本事業の検討段階から、1年間でビジョン作るのは非常に難しいというご指摘を何度もいただいたところではあるが、予算が単年度主義であるため、時間軸を長くとることは難しい。支援期間の前後をいかに削るかという工夫として、成果報告会の時期を予定では1月下旬としているが、場合によっては、活動をもう半月続けければ形になるのであれば、2月上旬まで活動いただき、それを速やかに報告会で発信できればと考えている。

<山崎委員>

- ・ビジョン作成支援は、何を成果にするかによって、かなり難しいと思う。例えば、ビジョンのウェブサイトとか冊子とか言葉とかを作って終わりだったら、2、3ヶ月でできると思うが、それをちゃんと地元住民の方々が受け入れて初めてその地域のビジョンになると思うので、それを踏まえると結構な駆け足になってしまう。そこは気を付けないと、ただなんか作っておしまいというよくあるパターンになってしまう懸念を感じている。
- ・あとは何年度先までこの事業をやるのかが見えてこない、ビジョン作成支援の対象に選ばれた地域が、ビジョンを作って終わってしまったら何の実行もないのか、次に実行計画を作って、組織を作って、何かしらの予算とか資金繰りをしていって、新しいことにチャレンジしたり、新しいことを始めたりみたいなことができて初めてビジョンの意味がある。その辺が今のところ、こういった資料には出てこない、予算がついてなくてもいいから、来年、再来年度ぐらいまでの目指している動きが見えた方が、応募してくる活動主体の人たちも、落ち着いて腰を据えて活動できるのではないかと。

<明石座長>

- ・その点は昨年度の議論においても、山崎委員から当初からご指摘があったところ。この募集にあたって、まさに今回支援される側の立場としては、単年度で終わりなのか、もしくは約束はできないけど、場合によっては年度をまたいで支援してもらえるのか、ということは非常に重要だと思う。それによってモチベーションも変わってくるし、手を上げる方の人数も変わってくると思う。その辺はどういう状況か。

<事務局>

- ・この事業については、議決がないので断言はできないが、少なくとも3年間は継続で予算要求をしていきたいと考えている。それ以外に中山間地域向けや地方創生関係等の既存の支援メニューもあるので、そういったメニューもお示ししながら、一定のレベルまで到達された方々については、次のステップとしての支援メニューの提示と活用に向けた伴走支援をしていくということはお示ししたい。次年度の予算が認められれば、今年度ビジョン作成をした方がもうワンアクションとして実証実験に進むという形をとればと考えている。

<明石座長>

- ・そういう見通しを公募の段階で、応募しようかなと思っている方に届けないといけないと思う。例えばチラシやホームページの中で説明してあるのか。

<事務局>

- ・現時点で明確に記載できるのは、県の既存の支援スキーム。それぞれに対象が異なるので、支援対象者に合った内容を示すことは可能。県全体として支援していくという表現はできると思う。

<佐藤委員>

- ・私は今年度、中山間地域チャレンジ支援事業を活用した活動を始めるが、昨年はその準備としてチームづくりに1年使った。この事業のスケジュールで申請できるのは、すでに組織が出来上がっているところだけではないか。

<山崎委員>

- ・多分そうなると思う。今からだと間に合わない。

<明石座長>

- ・一方では、限られた時間の中でやるための工夫として、いかにこの説明会に来てもらうかという工夫が大事だと思った。説明会への参加を呼び掛ける場合、通常だと募集要項等に説明会もやりますという感じでさらっと書いていることが多いが、紙とかwebだけでは伝わらないことがあるので、ぜひとも説明会に来てくださいという投げかけが、こういう事業ならなおさら必要。そのあたりの議論は委託事業者としているのか。

<事務局>

- ・昨年度から専門部会での議論において、こういう事業があるということを知らないのが現状なので、まず広く知ってもらいたいとご助言いただいた。それを踏まえて、説明会の開催時間を仕事の後でも参加しやすい夜に設定したり、オンライン参加も可能にするなどの工夫をしてる。8月上旬に富山市内で開催予定。県の広報ツールでの発信も行うが、委員の皆様にもお知り合いの方への周知にご協力賜れば助かる。

(8月7日(水)説明会開催：会場参加22人、オンライン参加35人、合計57人参加)

<明石座長>

- ・今、公募チラシとかウェブの制作状況はどのような感じか。

<事務局>

- ・チラシについては試作段階ができている。「世界が憧れる田園地域」の説明を入れたり、二つのコースの対象となる方や支援イメージを掲載したりしている。
- ・事業説明会に直接お越しいただける方には、応募用紙をどう書いていいかわからないとか、どういうふうに申請すればいいのかわからないという方も多くいらっしゃるのではないかと、応募用紙の書き方等について事務局が相談を承って、助言をさせていただきたいと考えている。そういった、しっかりサポートしますという姿勢も合わせてPRしていきたいと考えている。

<明石座長>

- ・こういう申請書の書き方すらわからない方から応募があるということが、この事業の1つの成果だと思っているので、そういう方により手厚いサポートをできる体制をぜひ作ってほしい。
- ・ビジョンづくりは皆さんがおっしゃる通り、本当に時間がかかることで、地域との合意形成はさらなるエネルギーが必要で、時間もかかる。体制にも限界があるとは思いますが、ビジョンづくりの方をかなり手厚く支援してもらいたい。

<荻布委員>

- ・事業2のビジョンづくりについて、今年度末に次のステップの支援メニューを示すということだが、ビジョンを作りながらアクションプランも考えないと絵に描いた餅になると思う。ビジョンとアクションプランがずれないようにフォローすることが必要。ビジョンを作ったあとで、何しようか、と止まってしまう例もあるのでは。
- ・事業1について、資料1では令和7年、8年にコンセプト作成と記載されている。今年度のコンセプト作成とどう異なるのかわかりづらい。

<事務局>

- ・一つ目のご質問について、伴走支援の内容について委託事業者に詳細な指示まではしていないが、実行段階に近づいたタイミングで、アクションプランを書けるところまでの支援も視野に入れたい。

<明石座長>

- ・荻布委員の質問の趣旨は、アクションプランではなく、ある程度アクションを伴う方がいいのではというものではないか。事務局と委託事業者で検討してもらいたい。

<事務局>

- ・二つ目の質問について、事務局としてはこの事業を3年間継続できるよう予算要求したいと考えている。3年間と想定して、まず今年度は4地域についてフィールド調査したうえで、1地域のコンセプト作成を行う。そして、令和7年、8年には、令和6年度にフィール

ド調査した残り3地域のうちから、各年度1地域ずつコンセプトを作成するという内容で予算要求できればと考えている。

<明石座長>

- ・荻布委員の質問の趣旨と違うのではないか。質問の趣旨は、昨年度の専門部会の議論では、令和6年度にプロデュースコンセプトを作成し、令和7年度以降はそのコンセプトに基づいた情報発信をするという話だったと思うが、資料1と異なるように思う、という意味だと理解している。

<荻布委員>

- ・その内容に加えて、先ほどの説明だと、今年度と来年度、再来年度はそれぞれ別の地域のコンセプトを作ると聞こえた。そうすると、コンセプトに基づいた情報発信はどこに行ったのか。

<事務局>

- ・資料1の1ページにおいて、コンセプト策定の部分に地域の方とのワークショップを記載している。コンセプトを作って終わりではなく、地域の方とコンセンサスを取りながら実現に向けた取組みが進むような形を支援していくことを考えている。
- ・この事業を委託する事業者を決めるプロポーザルにおいて、コンセプト作成後にそのコンセプトをどのように発信するかについても提案してもらった。地域資源やエリアが決まらなるとコンセプトが決まらないので、現時点では明確にどういった情報発信をするのかは想定が難しいが、コンセプトが見えてきた段階で皆様にもご助言いただきながら情報発信の方法を詰めていきたい。
- ・コンセプト策定後にどういった実装に移るかは、地域の皆様の話し合い状況によるが、事業2の実証実験コースに移行できるようであればそちらで支援できればと考えている。
- ・令和7年度以降は、令和6年度にフィールド調査した残りの3地域から、1地域ずつ選定して、そのプロデュース予算を獲得していきたいと考えている。

<荻布委員>

- ・イメージがたった。説明時にはわかりやすく表現されるとよい。

<山崎委員>

- ・資料中では、県と委託事業者、選定された4地域しか見えてこないが、市町村とのかかわりはどうなっているのか。

<事務局>

- ・こういった地域づくりには、市町村の皆さんのご理解とご協力がないとできないと思って

いる。そのため、来週、市町村の皆様向けの説明会開催を調整しているところ。市町村の皆さんにも理解いただいた上で公募が始まるという段取りを考えている。

<佐藤委員>

- ・この専門部会の場合に委託事業者にも入ってもらいたい。

<事務局>

- ・次回から同席いただくよう調整する。

<明石座長>

- ・私からの要望としては、委員からの質問を一旦しっかりと受けるのは県であり、委託事業者には県で答えづらい詳細な部分を答えてもらうという感じで同席してもらいたい。

<事務局>

- ・承知した。県が事業の主催者として、責任を持ってお答えすることがまずは大事だと考えている。

<山崎委員>

- ・事業1で作成するコンセプトと事業2におけるビジョンはかなり異なるものなのか。

<事務局>

- ・画面上のみで資料共有させていただく。こちらは事務局がイメージする事業1と事業2の守備範囲をビジュアル化したもの。
- ・事業2に応募する方にとって、既に明確に分かっているものの種類によって応募コースが判断できるように示している。例えば、実証実験コースの場合は、応募してこられる方が、すでにご自身がプレイヤーであり、活用したい地域資源の内容も分かっている、そして既にできあがったビジョンに基づいて実証実験に取り組みたいという方に応募していただくもの。プレイヤー、活用する地域資源、ビジョンの3つの項目全てがご自身で分かっている状態で応募していただくという想定。
- ・ビジョン作成コースは、応募してこられる方自身が、プレイヤーなので、プレイヤーについては分かっている状態だが、当然ながらビジョンはこれから作るので存在しない状態、また、どういった地域資源を活用するのかについてもはっきりしていない状態と思っている。こういった状態の方はビジョン作成コースに応募いただくという整理をしている。
- ・事業1は、応募という形式ではないが、地域資源調査を開始した時点では、どの地域にどんな地域資源があるかわからない、どこにどういったプレイヤーの方がいらっしゃるかわからない、そしてコンセプトもない状態と想定している。コンセプト作成の過程で住民の方とのディスカッションを経る中で、どういった地域資源を磨き上げていくかというのが次第

に分かっていくイメージ。また、プレイヤーについてはディスカッションの中で出て、出てきていただけるかもしれない。そして、コンセプトについてはこちらからベースとなる案をお示しするという状態。理想形ではあるが、コンセプト作成後のワークショップ時点では、どういった地域資源を磨き上げていくかという点、どういった方がプレイヤーになっていたかという点に加え、コンセプトがはっきりしている、こういった姿を目指していきたいと整理している。

- ・事業1でコンセプトを策定した地域が、地域資源の活用方法として、やりたいことがはっきりしているという状態になれば、事業2の実証実験コースに応募いただけると考えている。
- ・横軸と縦軸について、まず横軸は実際に取組みをするエリアというよりは、その取組みが波及するエリアの広さをイメージしている。事業1も事業2も、最初は特定の地域のみに限ったコンセプト作りや実証実験になるが、事業1はあくまでも「世界が憧れる田園」を県として目指していくという想定なので、このコンセプトを作っていくという取組み自体が県のモデルとして波及していけばと考えている。また、縦軸は各地域におけるビジョンに対する現段階での実施フェーズをイメージしている。ビジョン作成コースおよび事業1の地域資源の発掘調査の段階では、地域にビジョンがないと想定しているため、縦軸の下にある状態。ビジョンに基づいた取組みが実施されていると想定される実証実験コースは図の上方に位置している。

<明石座長>

- ・この表で整理するとより理解できた。来年度以降、世界が憧れる田園地域を県全体としてどうプロデュースするかを検討する前段階として全県調査であると整理すると、地域単位から市町村単位を経て県全体に波及していく、全県的なモデルとなるようなものに繋がっていくというストーリーをしっかりと発信、共有できれば事業1の立て付けもわかりやすいと思う。

<佐藤委員>

- ・とてもわかりやすかった。募集チラシにもこのような整理が入っていてほしい。

<山崎委員>

- ・私はまだよくわからない。ビジョン作成コースも色々あると思う。例えば、地域資源もわかっていて、プレイヤーもわかっていて、いろんなことをやろうとしているけどうまくいかなくて、よく考えたら向かっている方向がバラバラだよねという人たちにビジョン必要だと思ふ。そういうパターンもある。
- ・もう1点。地理的に分けて、小さい地域ともうちょっと大きい地域とみたいなのはあやふやすぎて難しい。具体名を出してもらえると助かる。

<明石座長>

- ・事業1は委託事業者が発掘しに行く、探しに行くもの。そこにはプレイヤーがない可能性の方が高い。事業2は公募をかけるので、プレイヤーが確実にいるということ。そこが最も大きな差だということのが私の理解。

<山崎委員>

- ・そうすると、事業1においては委託事業者が地域に調査に行くと、この地域はいいけどプレイヤーがないという地域が候補に出てくるということ。そこでプレイヤーを探し当てるとい感じなのか。

<事務局>

- ・例として、ある地域の区長さんが、地域住民の思いはあるが実行する若者がいないと悩んでおられて、現在、若い世代を集めるためのチームビルディングをしようかという話が出ている。そのようなイメージで、成長の種となりそうな可能性がある地域を発掘して、プレイヤー候補を見つけ、火種が起きるといのもこの調査の大事なポイントと考えている。
- ・必ずしもプレイヤーは探して見つかるものではないので、人集めに苦勞するかもしれないが、「ここに人がいれば魅力ある地域に化ける」という地域を見つけて、魅力をストーリー化することによってコミュニティを見つけたり、火種を起こすことにつなげたい。

<明石座長>

- ・その説明自体がまさに資料1の3ページ。先ほど「コミュニティ」がグレーになっているのはなぜか質問したが、それとリンクしていると思う。つまり、担い手がいないから廃れていくものが、実は10年後、うまいこと冷凍保存みたいにできて時代が変わったら、すごい価値が生まれる可能性もある。今の時代で廃れてしまったり、無くなってしまうことを防ぐという意味においても、プレイヤーありきではなくて、大事な地域資源だということを発掘して、テーブルに上げてみんなで評価してみようという趣旨だと受け止めている。だから、プレイヤーがいなくても発掘するのが事業1で、事業2はプレイヤーありきで応募してもらう事業だという差が決定的な差。

<事務局>

- ・プレイヤーやコミュニティが存在しないと、誰がやるのかというネックがあるので、事業1においてもプレイヤーやコミュニティが見つかる可能性があるかという点は対象地域を選ぶ際に大きな要素にはなると考えている。

<佐藤委員>

- ・事業1におけるヒアリングの仕方も大事だと思う。地域の方に個別で聞くの必要かもしれないが、3～4人程度を対象にヒアリングしながらお互いに話し合える場を設けてほしい。

<明石座長>

- ・事業2について、ビジョン作成型と実証実験型の2つの審査基準案が資料1の6～7ページに記載されている。これは公表されるので、手を挙げる方はこれをよく見て応募されると思う。今、記載されている内容について、事務局から委員に助言いただきたい箇所はあるか。

<事務局>

- ・ビジョン作成型については、何をやればいいかわからないけど想いがあるという方々を主な対象と想定した際、県外の方々の巻き込みを必須要件とするとハードル高すぎるのではないかと考え、加点ポイントにしている。この点についてご意見いただければありがたい。

<明石座長>

- ・この加点ポイントをビジョン作成型にあえて入れた意図は何か。

<事務局>

- ・専門部会の議論での、地域外の方々から見た地域資源の再評価が大事だというご意見を参考とした。地元の方々の想いだけではなく、外の方の視点を取り入れることで、よりいいビジョンができることを期待している。

<荻布委員>

- ・地域住民以外と書いてあるが、その地域にすでに住んでるUIターンの方も大事だと思う。ぜひUIターンの方という文言も入れていただきたい。

<山崎委員>

- ・昨年度の専門部会で、若い人とか女性の意見を取り入れた地域に加点した方がいいという議論があったと思う。それはどういう風に反映しているのか。

<事務局>

- ・審査の視点の実施体制に包含している。「若い人」という表現ではなく、「10年後を見据えた活動ができる」という表現としている。当然、10年後に男性だけで未来を描けるわけではないので、女性もそこに入っているという構成員のバランスを考慮している。

<明石座長>

- ・加点ポイントとして入れる方向で進めていただきたい。この表現方法で皆様にお伝えするという理解でよろしいか。

<事務局>

- ・もう少し硬い表現になるかもしれないが、応募書類にどんなことを書いていただきたいか伝わる形にしたい。

<明石座長>

- ・佐藤委員、この項目で手をあげようと思うか。

<佐藤委員>

- ・最後の加点ポイントがあると、ブラインドみたいな感じで、これがないとダメなのかという感じにならないようにした方がいい。結構ハードルが高いところだと思うので。女性という表現が入ると確かにいい。女性を含めたステークホルダーの巻き込みが図られているかという形で、女性も加わった構成メンバーなのかということも入ってもいいのかなと思う。

<明石座長>

- ・あえて書く難しさもあるが、書いてわかりやすいというのもまた大事。ここはまた議論いただきたい。

<山崎委員>

- ・ぜひ入れてほしい。文章だけ見たら、65歳の5人組が応募できる。それを避けるために議論してきた。

<明石座長>

- ・ある程度、新しいタイプの方が応募してくれるように、該当しない世代の方が「俺たちのことじゃないな」と分かってもらうことも大事。言葉の工夫は十分をお願いしたい。

<明石座長>

- ・実証実験型の方はどうか。私はここが1番心配。300万円の活動資金をしっかりと有効活用できる明確なビジョンを持っている方がどれだけいるかなという心配がある。

<佐藤委員>

- ・実証実験型は、既存の補助金の次の段階として考えていいのか。

<明石座長>

- ・実証実験型には、既存の補助金を使っている方が次のステップとして応募してもいいのかという確認。

<事務局>

- ・次のステップということであれば問題ない。当該年度に他の補助金等を使っている方が実証実験型と合わせてというのはお断りしたい。二重補助はできない。

<明石座長>

- ・実証実験型では年度末にはある程度、見える形の成果を作り上げるという理解でよいか。

<事務局>

- ・それぞれに取り組んでいる内容が異なるので、品物が必要な場合もあれば、組織体制と販路計画をつくる場合もある。内容に応じた成果をまとめていただければと思う。

<山崎委員>

- ・実証実験の方も若い人と女性の加点ポイントをつけた方がいいのでは。

<事務局>

- ・実施体制の部分で伝わるようにしっかり記載したい。